

# 生活

## 親子



診療を行う藤井勇さん＝平成元年 (藤井動物病院提供)



夜間にペットの診療を希望する飼い主が都市部で増加するなど、獣医の負担増が指摘されている。こうした中、獣医麻酔外科学会理事で藤井動物病院長、藤井康一さん(48)は平成16年1月、横浜市内で初めて夜間専門の動物病院「横浜夜間動物病院」(現「DVMsどうぶつ医療センター」)を開設した。獣医だった父、勇さんが大切にしていた初心を獣医たちが守るための設備でもあったという。

勇さんは「仕事の鬼」と呼ばれ、昼夜を問わず働いた。午前3時まで手術を続けている日もあった。康一さんは子供の頃、遊んだり親しく会話をしたりした記憶はない。当時の康一さんの毎晩の日課は、勇さんの手術を見ることだった。犬から取り出された寄生虫のフィラリア(犬糸状虫)を数えるのは兄の勇一さんと、康一さんの仕事。「子供を手術室に入れるのは今では考えられないこと。仕事を子供に見せておくのが教育の方針だったのかもしれない。後で年相応になって分かればいい」と

# 父の教え

## 獣医麻酔外科学会理事 藤井康一さん

術をしている日もあった。康一さんは子供の頃、遊んだり親しく会話をしたりした記憶はない。当時の康一さんの毎晩の日課は、勇さんの手術を見ることだった。犬から取り出された寄生虫のフィラリア(犬糸状虫)を数えるのは兄の勇一さんと、康一さんの仕事。「子供を手術室に入れるのは今では考えられないこと。仕事を子供に見せておくのが教育の方針だったのかもしれない。後で年相応になって分かればいい」と

## 「飼い主に真摯な姿勢を」

勇さんは昭和47年8月、フィラリアが犬の心臓の後ろの大静脈に詰まり、血行障害を起こす「後大静脈血栓症」の手術の手法を発表し、日本

### メッセージ

後を継いでから、今まで「守られていた」ことを感じた。自分で、自分なりの方法を考え出さなきゃいけないかったです。



幼い頃は、父の勇さんの手術を見て育ったという康一さん。器具台(左)は勇さんの代から使っていた＝横浜市港北区の藤井動物病院

〈ふじい・いさむ〉昭和5年、福島県出身。28年に麻布獣医科大(現麻布大)卒業後、29年、藤井動物病院開業。仕事の傍ら、犬、猫の治療に関する論文を多数発表。平成4年に神奈川県民功労者表彰を受賞。5年に黄綬褒章受章。9年12月、胃がんのため67歳で死去。

〈ふじい・こういち〉昭和37年、横浜市出身。63年に麻布大獣医学修士修了、獣医師免許取得。平成2～5年、米ペンシルベニア大獣医学校留学。5年から藤井動物病院勤務。22年11月発刊の犬の避妊・去勢に関する論文で、獣医麻酔外科学会の最優秀論文賞を受賞。

臨床獣医学会賞を受賞した。大学の獣医学部に在学中、勇さんの研究発表のため海外渡航に付き添ったことがある。2週間の日程を終えて帰国する際、勇さんは「治療は、ここからが大変なんだよ」とこぼした。

勇さんは動物に対し、決してフレンドリーではなく、むしろ支配的だった。「うちに来たからには何とかする。だから、おとなしくしていなさい、という感覚だったと思います」。しかし、2週間のプランクでは裏打ちされる技術が鈍る。「動物になめられる。だから外科医は、毎日手術をやらなきゃだめだ。飼い主に対して真摯でない」と。(勇さん)

勇さんは門下生である研修医たちが開業するとき、「どんなにはやっても、今日開業したつもりで頑張りなさい。初日の不安感、希望をずっと持っていれば、必ず成功します」と伝え続けた。

開業を経験していない自分の初心は何か。後を継いだ康一さんは悩んだ時期もあった。

勇さんの時代に比べ、患者(患者)は増え、急患でなくても夜にペットを持ち込む人も現れた。医師個人の努力では、夜間の医療の充実が難しい状況が生まれていた。

康一さんは「比較的余裕のある二代目にしかできないことがある」と、夜間専門の病院の開設を思い立ち、同じ世襲の獣医たちを中心に投資者を募った。勇さんが夜間診療まで一人で行った職人だったことから、門下生から反発も受けた。だが、勇さんが口にしてきた「飼い主に対する真摯な姿勢」を守るためには現実的な判断だったという。

康一さんは現在、保護した犬や猫の飼い主を見つけるための保護施設(シェルター)開設の準備を進めている。しばらく「初心」は続きそう

(織田淳嗣)